

第2学年の取組

(1) 実践内容「この町大すき～ぼくたち 町のたんけんたい～」

① はじめに

本年度は、主軸である(1)の取組を支える道徳的価値の一つ「生命の尊重」に重点を置いて学年の実践を計画した。生活科や道徳の時間を通して、動植物の命にふれ、命の尊さを感じる体験を大切に扱ってきた。そして「自分の命」と向き合ったときに切り離すことのできない「食べ物のいのち」について、自分でじっくり考えを深めたり、友だちと話し合ったりすることで、食や生命尊重の意識を高め合えたらと願った。

② 「動植物のいのちについて考えよう」

生活科の単元「ぐんぐんのびろ」「げんきにそだて」では、夏野菜やサツマイモ、冬野菜を育ててきた。また、野菜の栄養について、栄養士の先生から話を聞いたり、冬野菜の育て方について、専門家に教えていただいたりした。自分たちで種や苗から植物を育てる体験は、生命を育むことに通じ、食物に対する関心を高めるものであっただろう。子どもたちが自分で育てたトマトの実を愛おしそうに両手に包み「先生、こんなに採れたよ」と知らせに来たときの満面の笑顔が印象的だった。

出前授業「動物ふれあい教室」では、獣医さんたちから小動物について教えていただき、実際にウサギにふれあい、肌で体温を感じたり、聴診器で鼓動を聞いたりすることで生きている命を実感した。

③ ESD 道徳 主題「『いただきます』～いのちを食べる～」生命の尊重

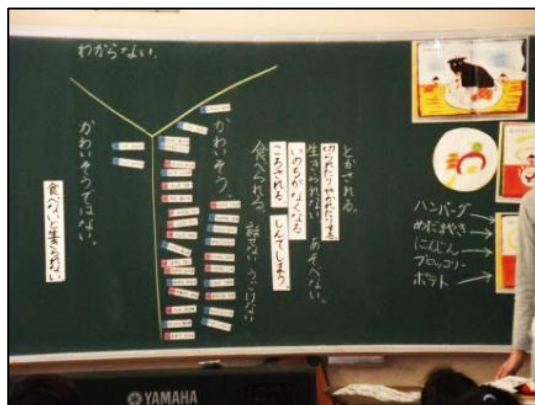
ア 導入の様子

はじめに校長先生が職員室で食べる給食の写真を見せると、子どもたちの関心が一気に高まったように感じた。給食の前に「いただきます」と言うことを確認したうえで、全員で手を合わせて「いただきます」と唱和してから、本時のめあてを確認した。

イ 展開の様子

絵本『いただきますーす!』より、ハンバーグや調理された野菜が皿にのっている絵を提示すると子どもたちから「おいしそう」という声が漏れた。すかさず、牛や取れたての野菜が皿にのっている絵を提示し「これはおいしそう？」と問うと、「えー!?!」「おいしそうじゃない」との非難めいた声が上がった。そこで、ハンバーグは元々生きていた牛の肉でできていることを子どもたちと確認し、食べ物と生き物とのつながりについて話し合った。

次に、食べ物になった生き物がかわいそうかどうか問いかけている場面を提示し、主発問として、「食べ物になった生き物は『かわいそう』か『かわいそうでない』のか」を問いかけた。子どもたちは自分の考えをワークシートに記入し、その考えをYチャートにネームプレートを貼ることで全体に開示した。結果は、出席者31人中、29人が「かわいそう」2人が「かわいそうでない」となり、「かわいそう」が圧倒的に多数となった。



【Yチャート】

ウ 高め合いの場面の様子

「かわいそう」を選んだ子どもたちの理由は「食べられてしまうから」「殺されてしまうから」「命がなくなってしまうから」「お腹の中で溶かされてしまうから」など、やはり命が失われることが

焦点となった。そこで、「本当だね。かわいそうだね」と共感を示してから「じゃあ、食べなければいいよね。32人（本クラスの児童数）が食べないと、牛一頭ぐらいいは助かるよね」と揺さぶりをかけてみた、首をかしげ、悩みだす児童がちらほら見受けられた。そして「かわいそうでない」を選んだ二人の児童に理由を聞いてみた。「ぼくも食べないと死んじゃうから」、この意見に「たしかに」「そうだな」などのつぶやきが聞こえてきた。「ハンバーグの材料の牛だって、他の命を食べているから」と、食物連鎖につながる意見も出てきた。子どもたちが「かわいそう」と思いながらも、心の中で葛藤する様子を見せ始めた。「では、どうやって食べたら、『かわいそう』だけではないくなるんだろう？」と問うと「残さず食べる」「感謝して食べる」「おいしく食べる」などの意見が上がった。さらに本クラスの給食の残菜の写真を見せ「かわいそう？」と問うと、はっとした様子で「かわいそうだ」と生き物の命を無駄にしていることを自分の問題として感じ取ることができた。

そこで、食べ物になった生き物の気持ちを考えて、ワークシートの吹き出しに書かせる活動へと展開した。「人から見た視点」から「食べ物から見た視点」への転換によって、子どもたちの考えが高まることを期待した。子どもたちは真剣にワークシートに書き込んでい



【生き物の気持ちを吹き出しに】

た。書き込んだ意見を発表させると、「残さず食べてくれたら僕は（食べられても）我慢する」「栄養がいっぱいあるし、頑張って育ったから食べてね」「せっかく命をあげるんだから全部食べて」「残されたらいやだな」など、一人一人が生き物の立場に立った意見をもつことができ、それぞれの考えに高まりが見られた。



【隣同士で感想交流】

二つの視点から考えたまとめとして、今後の食事の際、「いただきます」に続けて、心の中でどのようなことを唱えたいかを感想として書かせ、隣同士で感想交流をした。穏やかな雰囲気の中で友だちの言葉を聴き合う様子が見られ、それぞれの感想に共感を示すことができたようだ。その後「隣の人の言葉がよかったと思った人」を挙手させ、発表させた。友だちから認められたことで自信をもって発表することができ、またその発表に温かな拍手をおくることができた。

「いただきます。命をくれてありがとう」「いただきます。牛さんたちの栄養をもらって元気になります。ありがとう」「いただきます。ごめんね。ちゃんと食べるから許してね」「いただきます。食べてきみの分までがんばるよ」など、食べ物に対する感謝の気持ちが、それぞれの言葉によく表れていた。

エ 終末の様子

最後に資料として活用した絵本『いただきます！』（二宮由紀子、作・〈株〉解放出版社）の読み聞かせを行い、「いただきます」の意味、「あなたの命をいただいて、私の命に代えさせていただきます」を伝えた。どの子も静かに真剣に聴き入っていた。

オ 反省と課題

話し合い活動において、2年生という発達段階を考えたことと、個人内の心情の高まりに重点を置いたことにより、挙手による指名を多く行い、教師対児童の話し合いが主となった。ほとんどの児童が発言し活発な意見交流が図られたが、「かわいそう」か「かわいそうでない」かについて、小集団の意見交流を図ると、偏った意見にならずに「かわいそうでない」という意見がもっと出たのではないだろうか。

本授業により、ほとんどの児童が感謝して食べることが大切だと実感し、その日の給食時は一人一人が意識して、いつもより気持ちの入った「いただきます」の声を聞くことができた。また残菜は0にはならないが、少しでも食べようという姿勢が見られるようになった。

④ その後の活動

ア 感謝して食べよう週間」を時折り実施し、給食の後、「感謝して食べられたか」「残さず食べられたか」を自己チェックさせ、カードに色塗りさせることで、食べ物に対する感謝の気持ちを継続させるようにした。

イ 児童が栽培、収穫したサツマイモや冬野菜を、自分たちで調理し食べる「おいもパーティ」や「やさしいパーティ」をし、食べ物への感謝の気持ちをもたせた。

⑤ 実践の成果と課題

生活科の年間単元「ぐんぐんのびろ」や「げんきにそだて」を通して、子どもたちは自分たちで植物を世話し育てることを体験し、その難しさとともに成長や収穫の喜びを感じ取ってきた。また、「動物ふれあい教室」を通して、小さいけれどかけがえいのない命の尊さに気付くことができた。

それらをもとに、人間が生き物の命をいただいて生きていることを、道徳の授業で、食べ物になった生き物の命について考えを深めることで確かめ合うことができた。さらに活発な意見交換をしながら、自分の考えを見直し、食べ物への感謝の気持ちを高め合えた。

課題として、低学年における高め合いの場として、小集団や全体での話し合いの仕方を工夫することが残った。また「生命の尊重」を軸にしたつながりのある実践を改めて計画していく必要があると感じた。